

『アフロディテ讃歌』の中の アッティカ方言について^{*I}

泰田伊知朗

I はじめに

アンドリュー・フォークナー氏は2008年に最新の『アフロディテ讃歌』（以下、『讃歌』と略記）の校訂本^{*2}を出版した。これまで『讃歌』は『ホメロス讃歌』の校訂本の一部として取り上げられるのみであり、当該校定本は『讃歌』のみを対象とした初の本格的な校訂・注釈本といってよい。序文、コメンタリーともに内容量は豊富で、質が高い。重要な先行研究はほぼ取り上げられており、一つ一つのコメントも納得させる出来栄えに仕上がっている。1488年に初の校訂本が出版されて以来、『讃歌』に向けられてきた研究のひとつの集大成である。この校訂本の書評はどれも賛辞に満ちており^{*3}、筆者も、氏の校定本はその賛辞に十分値するものと考えている。

しかし、I点考慮すべき問題点が見出される。本稿ではこの点について言及したい。

フォークナーのテキストは、「『讃歌』にはアッティカ方言は含まれない」^{*4}ことが前提となつて校訂されている。この前提をもとに、氏は、写本に残されたアッティカ方言と判断できる語形は全てイオニア方言に直してテキストに印刷している。言うまでもなくイオニア方言は叙事詩の主言語であり、『讃歌』の大部分はイオニア方言でできている。

だが氏の前提には異論の余地がある。前提の根拠は決して確固たるものではなく、古代の書物や注釈がその事実を証言する根拠のある情報ではない。不確かな前提をもとにして写本の情報に手を加えることには慎重であるべきだろう。

本稿では、「アッティカ方言は含まれない」という前提の不確かさを立証し、この前提

^{*1} 本論文は、2008年10月17日に東京大学で開催された第8回フィロロギカ研究集会で行なった報告に加筆修正を施したものである。さまざまな方々から貴重なご意見を賜った。この場を借りて謝意を表したい。

^{*2} Faulkner 2008.

^{*3} この本の書評に関しては以下を参照：E. S. Greene, *CR* 59-2 (2009), 335-337; L. Carrara, *BMCR*, 2009, <http://bmcr.brynmawr.edu/2009/2009-02-26.html>; M. Heath, *G&R* 56-2 (2009), 249.

^{*4} 特に Faulkner 2008: 45 参照。

のみを理由にして写本の情報を否定することが困難であることを証明したい。

2 『アフロディテ讃歌』の写本に残されたアッティカ方言について

フォークナーは、アッティカ方言の形が写本の中に残されていることは認めるが、それらは全てイオニア方言へ変更できることから、『讃歌』を作るにあたってアッティカ方言の影響はなかったとし、写本の中のアッティカ方言を採用しない。以下は写本に残されたアッティカ方言とフォークナーが変更した形である^{*5}：

	写本	フォークナー	備考
51	υίεις	υίας ^{*6}	フォークナーの新しい読み。
72	ῆεσ(σ)αν	ῆϊσαν ^{*7}	ほとんどの校訂者はフォークナーの形。
125	ἐδόκουν	δόκεον ^{*8}	ウエスト ^{*9} を除き、ほとんどの校訂者は写本の形。
267	τεμένη	τεμένεα ^{*10}	フォークナーの新しい読み。この形は Synizesis。
284	ἐγγονον	ἐκγονον ^{*11}	ほとんどの校訂者はフォークナーの形。

2.1 フォークナーが考える『アフロディテ讃歌』の作成時期と場所について

アッティカ方言が詩人のオリジナルであることをフォークナーが認めないことに大きく関わるのは、氏が『讃歌』は7世紀後半以前に、アイオリスなどの小アジア北部で作られたと判断していることである^{*12}。だがこの年代と場所はいずれも根拠の強いものとはいえない。少なくとも写本に残されているアッティカ方言を完全に否定するだけの根拠はない

^{*5} フォークナーは、写本に残されたアッティカ方言の語形である 98 行目の *νυμφῶν* もイオニア方言の形 *νυμφέων* に変えることができると述べている (45 頁)。だがテキストでは (62 頁)、この行を後代のインターポレイションだと判断して削除し、*νυμφῶν* をそのまま載せている。

^{*6} *υίεις* (複数対格) の例：Ar. V. 569, X. HG. 2. 1. 8. 2. *υίας* の例：Il. 1. 240, 2. 72.

^{*7} *ῆεσαν* の例：X. Ath. 1. 18. 5, Arist. Rh. 1385a. 12. *ῆϊσαν* の例：Il. 10. 197, 13. 305.

^{*8} ホメロスでは *-εω* 動詞が *-εο* を縮約することは滅多にない。Cf. Monro 1891: 55.

^{*9} West 2003: 168.

^{*10} ホメロスの中で *-εα* が縮約されないことや、シュニゼシスになることについては、Chantraine 1958: 56 参照。

^{*11} *ἐγγονον* の例：S. OT. 1474, Ar. Eq. 786. *ἐκγονον* の例：Il. 20. 206, Od. 3. 123.

^{*12} Faulkner 2008: 47–50 参照。ここで、年代についてフォークナーははっきりと特定せず、8世紀後半から7世紀の終わりまでの間でいくつかの可能性を挙げている。いずれにせよ、氏は7世紀後半以前に『讃歌』が作られたと考えている。

と言える。

2.1.1 年代について

フォークナーは『讃歌』の時代を特定する際に、まず『讃歌』はホメロスとヘシオドスより後の作品で、『デメテル讃歌』より前であるとする。ホメロスとヘシオドスより後の作品であることは、恐らく間違いないであろう。『讃歌』の詩人が、ホメロスとヘシオドスの作品を知っていたことは広く認められており、異論の余地はほとんどない^{*13}。

『デメテル讃歌』と『讃歌』の関係については数多くの共通する読みがあり、どちらかの詩人が他方の詩を直接参照したことが、一般的に認められている^{*14}。そしてどちらが先かという点に関しては、フォークナーを含め多くの校訂者が『讃歌』のほう为先であるとする^{*15}。主な理由は、両讃歌が似たような文言を含む数箇所^{*16}、『讃歌』の内容のほうがより自然だからである。内容が自然か不自然かという問題は主観が含まれる問題であるため、二つの讃歌の前後関係に関しては研究者のあいだで見解の一致をみていない^{*17}。仮にフォークナーと同様に『デメテル讃歌』の詩人が『讃歌』を参照したと考えるならば、氏も言うように、『デメテル讃歌』は最も遅くて紀元前 550 年に作られた可能性があるの^{*18}、『讃歌』の作成時期の下限はその直前までさげることができる。

次に作成時期の上限について考えたい。フォークナーは、アイネイアダイの問題と結び付けてこれを説明する。

アイネイアダイとは、小アジアに住んでいたと考えられる王族であり、自らをアイネイアスの子孫であると主張していた。彼らについての記述がストラボンにも残されてい

^{*13} Janko 1982: 165–69 は、『讃歌』が『神統記』と『労働と日々』の間に作られたと述べるが、説得力はあまりない。Faulkner 2008: 36–38 の反論を参照。

^{*14} Cf. Faulkner 2008: 38–40. その他にも、Hoekstra 1969: 56, Van Eck 1978: 24, Janko 1987: 163–65 参照。

^{*15} 同様の見解については、Hoekstra 1969: 56, Richardson 1974: 42–43, Janko 1987: 163–65 参照。

^{*16} 特に以下の箇所を参照：*h. Ven.* 31–32 *πᾶσιν δ' ἐν νηοῖσι θεῶν τιμάσχος ἐστί | καὶ παρὰ πᾶσι βροτοῖσι θεῶν πρέσβειρα τέτυκται* 「神々のすべての神殿で彼女はあがめられ、全ての人間たちのもとでは神々の中で最も威厳を持つものとされる」～*h. Cer.* 268–69 *εἰμὶ δὲ Δημήτηρ τιμάσχος, ἥ τε μέγιστον | ἀθανάτοις θνητοῖσι τ' ὄναρ καὶ χάρμα τέτυκται* 「私は崇められるべきデメテル、不死なる者たちにとっても、死すべき者たちにとっても最も大きな助けであり、喜びであるぞ」。*h. Ven.* 173–75 *ἔστι ἄρα κλισίη, εὐποιήτοιο μελάθρου | κύρε κάρη, κάλλος δὲ παρειᾶν ἀπέλαμπεν | ἄμβροτον, οἶον τ' ἐστὶν εὖστεφάνου Κυθρείης* 「小屋で立つと、よく作られた梁に頭がぶつかった。そして頬から不死なる美しさが輝き出た。美しい冠いただくキュテラ女神の持つようなそんな美しさである」～*h. Cer.* 188–89 *ἔδραμον, ἥ δ' ἄρ' ἐπ' οὐδὸν ἔβη ποσὶ καὶ ῥα μελάθρου | κύρε κάρη, πλῆσεν δὲ θύρας σέλαος θεῖοιο* 「彼女たちは走った。だが女神は敷居に足で上がり、梁に頭がぶつかった。そして扉を神々しい光で満たした」。

^{*17} 大半の研究者に反して、Van Eck 1978: 24 は『デメテル讃歌』のほうが先だとする。

^{*18} Faulkner 2008: 48. その他に Richardson 1974: 10 参照。

る^{*19}。以前から『讃歌』はこのアイネイアダイを讃えるために作られたと考えられていた^{*20}。『讃歌』がアイネイアダイのために作られたとする説の主な根拠は、アイネイアスの子孫の繁栄について語った予言である：*h. Ven.* 195-98「そして他の至福な者たちからも悪しき恐ろしきことをこうむることはない。なぜならお前（アンキセス）は、神々にとって愛すべき者だからだ。お前は、愛らしい息子を持つだろう。その子は、トロイア人たちの中で王になり、子孫たちは子孫たちへと、切れ目なく生まれるだろう。そしてその子は、アイネイアスという名前を持つだろう」。この説に対して 20 世紀後半にスミスを中心に反論が広がり^{*21}、あまり支持されなくなったこともあったが^{*22}、ウエストはこの説を改めて支持した^{*23}。フォークナーも、『讃歌』がアイネイアダイのために作られたことに同意する。氏は、アイネイアスとその一族の誕生は『讃歌』の大きなテーマであり、『讃歌』の中でそのテーマが色濃く見られると述べている^{*24}。

アイネイアダイの存在を支持する研究者たちは、『讃歌』の中の予言と同様に、『イリアス』20 巻のアイネイアスとその一族への予言もアイネイアダイに対してさきげられた文言だと考える：*Il.* 20. 307-08「今に、アイネイアスがトロイア人たちの間で王になるだろう。そして将来生まれてくる子供たちから子供たちへと」。

ウエストはこの『イリアス』での予言と、『讃歌』の中でのアイネイアスの予言の間には、多くても 1 世代ほどの時間の差しかないと推測する^{*25}。フォークナーはウエストのこの言葉を主な根拠として、7 世紀後半以前に『讃歌』が作られたと想定する。

だがフォークナーのこの想定には賛同できない。まずウエストの「1 世代ほどの差しかない」という説には特に根拠がなく、説得力に欠ける。逆にヘクストラは、『讃歌』と『イリアス』の予言の間には「長い時間」がたっていると考える^{*26}。またヤンコは、『讃歌』はアイネイアダイのことを歌っているのかもしれないが、アイネイアダイの目の前で歌ったかどうかは別だと主張する^{*27}。

以上のことから、『讃歌』の成立年代は上限である『イリアス』からどれほど離れてい

^{*19} Str. 13. 1. 52-53.

^{*20} 例えば Humbert 1936: 144 参照。

^{*21} Smith 1981.

^{*22} Cf. Clay 2006: 153 (n. 3).

^{*23} West 2003: 14-16.

^{*24} Faulkner 2008: 7.

^{*25} West 2003: 15.

^{*26} Hoekstra 1969: 40.

^{*27} Janko 1987: 158. その他に以下の Allen, Halliday & Sikes 1936: 351 を参照：“Again it was supposed to have been composed in honour of a descendant of Aeneas. But it bears no trace of having been written on a definite occasion, or for a particular person.”

るか不明である。もし『デメテル讃歌』が下限としても、紀元前 550 年頃まで下がる可能性がある。従って、『讃歌』が 7 世紀後半以前につくられた」という説を完全に否定することはできないが、この説は極めて根拠の薄いものと判断できる^{*28}。

2.1.2 小アジア北部という起源について

フォークナーが、『讃歌』が作られた場所をアイオリスなど小アジア北部だと考える根拠には以下のものがある：(1) 113-16 行目に、トロイア語とフリュギア語という 2 つのアジアの言語への言及がある。(2) 『讃歌』とアイネイアダイは関係がある。(3) 『讃歌』と、レスボスの詩人サッポーおよびアルカイオスと共通する読みが多い。(4) アイオリス方言と考えられる *καλός* (29、261 行目) および *τιμάοχος* (31 行目) がある。

これらのうち (1) については多少なりとも説得力のある根拠だと考える。113-16 行目ではアフロディテ扮する女性が、自分がトロイア語とフリュギア語を習得している理由を説明している。フォークナーによれば、小アジア北部ヘレスポントス海峡近くではギリシャとフリュギアの交流が以前からあり、このような環境の中で『讃歌』が作られたことが、トロイア語とフリュギア語のバイリンガルであることの言及につながった^{*29}。またアレン、ハリデー、サイクスもアジアの近接する両言語の違いを知っていることは、『讃歌』のアジア起源を表すと述べる^{*30}。確かにアジアの言語に関する詩人の深い知識が、『讃歌』のアジア起源を指す可能性はあるだろう。だが当然、この一節だけを以って、『讃歌』が小アジアで作られたと確定することは難しい。詩人が小アジアに関する知識を持っていることが、詩人がそこの出身だったり、そこで『讃歌』を作ったことを指すとは必ずしも言えない。では、そのほかの理由も見てゆこう。

(2) の『讃歌』とアイネイアダイのつながりについては、ここでも説得力を持つ根拠にはならない。というのも、先にも見たように『讃歌』がアイネイアダイの前で歌われたかどうかということが不明だからである。

(3) のサッポー、アルカイオスとのつながりに関して、フォークナーは、『讃歌』と両者の間のよく似た文言から共通の手本を想定し、『讃歌』がレスボスや小アジアの北部で

^{*28} その他にフォークナーは、『讃歌』とサッポーやアルカイオスとの間に類似点が多いことから、2 人が活躍した時期に『讃歌』の作成時期に近い可能性、すなわち 7 世紀後半に近い可能性を述べる。だがフォークナー自身もこのやり方で年代をはっきりさせることは難しいことを認めている (Faulkner 2008: 49)。また氏は、『讃歌』とサッポーおよびアルカイオスとの共通点から、『讃歌』の作成場所を特定しようとする。詳しくは本稿 2.1.2 参照。

^{*29} Faulkner 2008: 49.

^{*30} Allen, Halliday & Sikes 1936: 360.

作られたと考える^{*31}。だが、共通の文言をもとに作られた場所が近いことを断言することはできない。例えば、先にも見たように『讃歌』と『デメテル讃歌』の間には共通点が多くあるが、『デメテル讃歌』は一般的にアッティカで作られたと考えられている^{*32}。従って、サッポーとアルカイオスとの共通点から『讃歌』がレスボスや小アジア北部で作られたと言うのであれば、『デメテル讃歌』との共通点から『讃歌』はアッティカで作られたとも言えることになり、矛盾が生じる。

最後に、(4)のアイオリス方言と考えられる語彙についてである。まず短い α を伴う $\kappa\alpha\lambda\acute{o}s$ に関してであるが、確かにホメロスでは $\kappa\alpha\lambda\acute{o}s$ の α は長く、短い α をアイオリス方言の影響だとする学者もいる^{*33}。だが決して確定しているわけではなく、例えばウエストは $\kappa\alpha\lambda\acute{o}s$ がアッティカ方言か、イオニア諸島方言か、アイオリス方言のどれかだと考えている^{*34}。またヘシオドスの *Th.* 585, *Op.* 63 でも、短い α を伴う $\kappa\alpha\lambda\acute{o}s$ がある。『讃歌』の詩人がヘシオドスのこれらの例を参照した可能性を考えれば^{*35}、短い α を根拠に『讃歌』がアイオリスで生まれたとは断言できない。また $\tau\mu\acute{\alpha}\sigma\chi\omicron\varsigma$ に関してはアイオリス方言だと考える学者はフォークナーの他にもいるが^{*36}、ツンバツハのようにアッティカ方言だと考えるものもいる^{*37}。さらに、たとえ $\tau\mu\acute{\alpha}\sigma\chi\omicron\varsigma$ がアイオリス方言だとしても、この一語をもとにしてアイオリス起源を断定することはできない。アイオリス方言を使っていることが、『讃歌』の作成場所や詩人の出身地をアイオリスに特定するとは必ずしも言えないからである。というのも、 $\tau\mu\acute{\alpha}\sigma\chi\omicron\varsigma$ は、アッティカで作られたであろう『デメテル讃歌』の 268 行目にもある^{*38}。すなわち $\tau\mu\acute{\alpha}\sigma\chi\omicron\varsigma$ がアイオリス方言だとしても、アッティカで作られた『デメテル讃歌』の詩人はアイオリス方言を受け入れている。従って作成場所や出身地がアイオリス以外でも、『讃歌』の詩人はアイオリス方言を自分の詩に導入することに抵抗がなかった可能性もある。

以上のことから、2.1 の結論として次のように言える。『讃歌』が7世紀後半以前に作られたという前提も、アイオリスなどの小アジア北部で作られたという前提も決して否定さ

^{*31} Faulkner 2008: 47.

^{*32} Allen, Halliday & Sikes 1936: 126, Janko 1982: 183.

^{*33} E.g. Kamerbeek 1967: 387, Càssola, 546.

^{*34} West 1966: 82.

^{*35} 同様の見解に関しては、Gemoll 1886: 263, Van Eck 1978: 23 参照.

^{*36} Cf. Hoekstra 1969: 56.

^{*37} Zumbach 1955: 57.

^{*38} $\tau\mu\acute{\alpha}\sigma\chi\omicron\varsigma$ という語は、現存する作品の中では『讃歌』と『デメテル讃歌』でしか見られない。『讃歌』を『デメテル讃歌』の詩人が参照したため、この語が『デメテル讃歌』にも残されたと考えられている。Cf. Hoekstra 1969: 56.

れるわけではないが、根拠が非常に強いものとはいえない。

2.2 写本の中のアッティカ方言

今の 2.1 の結論から考えれば、確かにアッティカ方言は『讃歌』が 7 世紀後半以前にアイオリスなどの小アジアで作られた」という前提にそぐわないかもしれないが、その前提自体が不確かなので、写本に残されたアッティカ方言の語形をわざわざ変更して校訂本の本文に載せることは、根拠の薄いことだといえる。にもかかわらず、フォークナーは写本のアッティカ方言をイオニア方言に変更している。

写本の中にアッティカ方言の形が残されている理由について、フォークナーは、『讃歌』の写本伝承がアッティカ地方で行われたと想定する^{*39}。また写本に残されているアッティカ方言の形は写字生が後から変えたものと容易に判断できると述べている^{*40}。言い換えれば氏は、アッティカで写本伝承が行われ、アッティカ方言に馴れている写字生たちが叙事詩の形をアッティカ方言に変更した、と考えている。

もし氏の言う通りであれば、同じような変更が別の箇所にも残されていてしかるべきであろう。『讃歌』が他の『ホメロス讃歌』と一緒にあったあとにアッティカ地方でこの変更が行われたのであれば、当然、他の『ホメロス讃歌』にも同じような変更が残されているだろう。もし他の『ホメロス讃歌』と一緒になる前に変更が行われたのであれば、少なくとも『讃歌』には同じような変更が残されているだろう。

以下は、そうした変更が他にあるかどうか現存する写本を確認した結果である^{*41}。

51. 写 $\upsilon\acute{\iota}\epsilon\acute{\iota}\varsigma$, F. $\upsilon\acute{\iota}\alpha\varsigma$: ここではフォークナーがはじめて写本の形を否定し、 $\upsilon\acute{\iota}\alpha\varsigma$ を採用した。『ホメロス讃歌』の中には、 $\upsilon\acute{\iota}\epsilon\acute{\iota}\varsigma$ と $\upsilon\acute{\iota}\alpha\varsigma$ は他に例がない。従って、 $\upsilon\acute{\iota}\alpha\varsigma$ を $\upsilon\acute{\iota}\epsilon\acute{\iota}\varsigma$ と変更することが、『ホメロス讃歌』の写本に携わってきた歴代の写字生たちの中の誰かにとって一般的なことであったか否か判断できない。だが、少なくとも『讃歌』の中で語尾に $-as$ がくる例は 55 箇所あるが、 $-\epsilon\iota\varsigma$ と書き間違えている例はない。

72. 写 $\eta\epsilon\sigma(\sigma)\alpha\nu$, F. $\eta\acute{\iota}\sigma\alpha\nu$: イルゲンの提案した $\eta\acute{\iota}\sigma\alpha\nu$ が、フォークナーも含めて『讃歌』の多くの校訂者たちによって採用されている。『ホメロス讃歌』の中には $\eta\acute{\iota}\sigma\alpha\nu$ および $\eta\epsilon\sigma\alpha\nu$ いずれの例もない。だが M 写本に含まれる Il. 10. 197 では $\eta\acute{\iota}\sigma\alpha\nu$ と残されている。従っ

^{*39} Faulkner 2008: 45, 290.

^{*40} Faulkner 2008: 134, 200.

^{*41} 最重要写本 M と写本 L, E, P を直接参照した。それ以外の写本については、主な校訂本のアパルトス・クリティクスを参考にした。調べた校訂本: Allen & Sikes 1904, Allen 1912, Humbert 1936, Càssola 1975.

て、『讃歌』に携わったある写字生にとって $\eta\acute{\iota}\sigma\alpha\nu$ を $\eta\epsilon\sigma\alpha\nu$ と変更することが一般的であったことを証明する例は写本の中にはない。

125. 写 $\epsilon\delta\acute{o}\kappa\omicron\nu\nu$, F. $\delta\acute{o}\kappa\epsilon\omicron\nu$: ウエストも支持した $\delta\acute{o}\kappa\epsilon\omicron\nu$ をフォークナーは採用する。『ホメロス讃歌』の中で $-\omicron\nu\nu$ と書くことができる $-\epsilon\omicron\nu$ の例は以下の 5 例である :

		M	L	E	P
<i>h.Ap.</i> 135	$\theta\acute{\alpha}\mu\beta\epsilon\omicron\nu$	$\theta\acute{\alpha}\mu\beta\epsilon\omicron\nu$	$\theta\acute{\alpha}\mu\beta\epsilon\omicron\nu$	$\theta\acute{\alpha}\mu\beta\epsilon\omicron\nu$	$\theta\acute{\alpha}\mu\beta\epsilon\omicron\nu$
<i>h.Ap.</i> 399	$\epsilon\pi\lambda\epsilon\omicron\nu$	$\epsilon\pi\lambda\epsilon\omicron\nu$	$\epsilon\pi\lambda\epsilon\omicron\nu$	$\epsilon\pi\lambda\epsilon\omicron\nu$	$\epsilon\pi\lambda\epsilon\omicron\nu$
<i>h.Ap.</i> 408	$\epsilon\pi\lambda\epsilon\omicron\nu$	$\epsilon\pi\lambda\epsilon\omicron\nu$	$\epsilon\pi\lambda\epsilon\omicron\nu$	$\epsilon\pi\lambda\epsilon\omicron\nu$	$\epsilon\pi\lambda\epsilon\omicron\nu$
<i>h.Ap.</i> 437	$\epsilon\pi\lambda\epsilon\omicron\nu$	$\epsilon\pi\lambda\epsilon\omicron\nu$	$\epsilon\pi\lambda\epsilon\omicron\nu$	$\epsilon\pi\lambda\epsilon\omicron\nu$	$\epsilon\pi\lambda\epsilon\omicron\nu$
<i>h.</i> 6. 11	$\epsilon\kappa\acute{o}\sigma\mu\epsilon\omicron\nu$	$\epsilon\kappa\acute{o}\sigma\mu\epsilon\omicron\nu$	$\epsilon\kappa\acute{o}\sigma\mu\epsilon\omicron\nu$	$\epsilon\kappa\acute{o}\sigma\mu\epsilon\omicron\nu$	$\epsilon\kappa\acute{o}\sigma\mu\epsilon\omicron\nu$

写本の中で $-\epsilon\omicron\nu$ が $-\omicron\nu\nu$ と書き換えられている例はない。従って、『讃歌』に携わったある写字生にとって $-\epsilon\omicron\nu$ を $-\omicron\nu\nu$ と変更することが一般的であったことを証明する例はない。

267. 写 $\tau\epsilon\mu\acute{\epsilon}\nu\eta$, F. $\tau\epsilon\mu\acute{\epsilon}\nu\epsilon\alpha$ (Synizesis) : フォークナーが初めて $\tau\epsilon\mu\acute{\epsilon}\nu\epsilon\alpha$ というシュニゼシスの形を提唱した。『ホメロス讃歌』の中で、 $-\omicron\varsigma$ ($\epsilon\omicron\varsigma$ - $\omicron\upsilon\varsigma$) 型の中性名詞複数主格・対格で $-\epsilon\alpha$ を持ち、理論上は $-\eta$ と書いてよい例は 19 例ある :

		M	L	E	P
<i>h.Cer.</i> 340	$\kappa\epsilon\acute{\upsilon}\theta\epsilon\alpha$	$\kappa\epsilon\acute{\upsilon}\theta\epsilon\alpha$	—	—	—
<i>h.Ap.</i> 76	$\alpha\lambda\sigma\epsilon\alpha$	$\alpha\lambda\sigma\epsilon\alpha$	$\alpha\lambda\sigma\epsilon\alpha$	$\alpha\lambda\sigma\epsilon\alpha$	$\alpha\lambda\sigma\epsilon\alpha$
<i>h.Ap.</i> 533	$\sigma\tau\epsilon\acute{\iota}\nu\epsilon\alpha$	$\sigma\tau\epsilon\acute{\iota}\nu\epsilon\alpha$	$\sigma\tau\epsilon\acute{\iota}\nu\epsilon\alpha$	$\sigma\tau\epsilon\acute{\iota}\nu\epsilon\alpha$	$\sigma\tau\epsilon\acute{\iota}\nu\epsilon\alpha$
<i>h.Merc.</i> 159	$\alpha\gamma\kappa\epsilon\alpha$	$\alpha\gamma\kappa\epsilon\alpha$	$\alpha\gamma\kappa\epsilon\alpha$	$\alpha\gamma\kappa\epsilon\alpha$	$\alpha\gamma\kappa\epsilon\alpha$
<i>h.Ven.</i> 270	$\delta\acute{\epsilon}\nu\delta\rho\epsilon\alpha$	$\delta\acute{\epsilon}\nu\delta\rho\epsilon\alpha$	$\delta\acute{\epsilon}\nu\delta\rho\epsilon\alpha$	$\delta\acute{\epsilon}\nu\delta\rho\epsilon\alpha$	$\delta\acute{\epsilon}\nu\delta\rho\epsilon\alpha$ など ^{*42}

これらの 19 例のうち、写本の中で $-\eta$ と書き換えられている例はない。またフォークナーは $\tau\epsilon\mu\acute{\epsilon}\nu\epsilon\alpha$ というシュニゼシスを提唱するが、『讃歌』の中でシュニゼシスは多くない。彼のテキストの中でシュニゼシスの例は 293 行の中で 4 例しかない^{*43}。従って $\tau\epsilon\mu\acute{\epsilon}\nu\epsilon\alpha$ というシュニゼシスの形にそれほど信憑性はない。

284. 写 $\epsilon\gamma\gamma\omicron\nu\nu$, F. $\epsilon\kappa\gamma\omicron\nu\nu$: バルネスの提案した $\epsilon\kappa\gamma\omicron\nu\nu$ が、フォークナーも含めて『讃

^{*42} その他に以下を参照 : *h.Cer.* 6 $\alpha\acute{\nu}\theta\epsilon\acute{\alpha}$, *h.Cer.* 38 $\beta\acute{\epsilon}\nu\theta\epsilon\alpha$, *h.Cer.* 170 $\alpha\gamma\gamma\epsilon\alpha$, *h.Cer.* 249 $\kappa\acute{\eta}\delta\epsilon\alpha$, *h.Cer.* 381 $\alpha\gamma\kappa\epsilon\alpha$, *h.Cer.* 415 $\kappa\epsilon\acute{\upsilon}\theta\epsilon\alpha$, *h.Cer.* 425 $\alpha\acute{\nu}\theta\epsilon\alpha$, *h.Ap.* 143 $\alpha\lambda\sigma\epsilon\alpha$, *h.Ap.* 221 $\alpha\lambda\sigma\epsilon\alpha$, *h.Ap.* 245 $\alpha\lambda\sigma\epsilon\alpha$, *h.Ap.* 489 $\epsilon\acute{\nu}\tau\epsilon\alpha$, *h.Ven.* 20 $\alpha\lambda\sigma\epsilon\acute{\alpha}$, *h.Ven.* 97 $\alpha\lambda\sigma\epsilon\alpha$, *h.* 14. 5 $\omicron\upsilon\tau\epsilon\acute{\alpha}$.

^{*43} 53, 126 $\Lambda\gamma\chi\acute{\iota}\sigma\epsilon\omega$, 148 $\epsilon\tau\mu\acute{\epsilon}\omega$, $\epsilon\mu\eta$, 293 $\sigma\acute{\epsilon}\omega$.

歌』の多くの校訂者たちによって採用されている。『ホメロス讃歌』の中で -κγ- の例は以下の 2 例である：

	M	L	E	P
<i>h. Cer.</i> 237	ἐκγεγαῶτα	ἐκγεγαῶτα	—	—
<i>h. Ven.</i> 197	ἐκγεγάονται	ἐκγεγάονται	ἐκγεγάονται	ἐκγεγάονται

-κγ- が -γγ- と変更されている例はない。従って、『讃歌』に携わったある写字生にとって -κγ- を -γγ- と変更することが一般的であったことを証明する例はない。

以上のことから、2.2 の結論として次のように言える。フォークナーが想定するような変更が、『讃歌』を含む『ホメロス讃歌』の歴代の写字生たちの中の誰かにとって一般的なことだったとは言えない。

3 まとめ

2.1 の結論と 2.2 の結論から次のように言える。7 世紀後半以前にアイオリスなど小アジアで作られたというフォークナーの説は根拠が弱い。そしてフォークナーが想定する形でのイオニア方言からアッティカ方言への書き換えを写字生たちが行ってきたことを示す証拠はなかった。従って、写本に残されているアッティカ方言の語形が詩人のオリジナルであることを、否定する理由はない。フォークナーのように、根拠がそれほどない『讃歌』にはアッティカ方言は含まれない」という前提をもとに写本の情報を疑い、その前提を守るために写本の情報を変更することには必然性がない⁴⁴。

最後に上で見てきたアッティカ方言の語形を詩人のオリジナルだと考えた場合、これらが意味する詩人像について推論を述べておきたい。

まずこれらの語形が意味することは、詩人がこれらの語形を知っていた人物だということである。詩人は、アッティカ方言に関する知識が多少なりともあり、さらにホメロスの言語にも精通していた人物である。そして詩の大半をホメロスの言語で作ったのに、アッティカ方言を少し残している人物である。

ではどうして詩人はイオニア方言の中に上記のアッティカ方言の語形を残したのか。そ

⁴⁴ 池田 1991: 193 は文献学者の使命として以下のように述べる：「もし、説明をもって本来の使命としている文献学や歴史学が、説明に行きつまった際、「いかにそれはあったか」を追及する敬虔な態度をすて、いきなり「それはかくあるべきであった」とあらため、安易に訂正でもしてしまったなら、九仞の功を一簣に欠くということにならざるをえない。そんなことをする位なら、研究などをやめて、はじめからかくあるべきだときめてしまう方が早みちだったわけである。」

の理由について 2 通りの可能性を提示したい。

Ⅰ つ目は、詩人が出来上がった後、これらの語形をアッティカ方言からイオニア方言に直せなかった、もしくは直し忘れた可能性である^{*45}。この可能性を考える上で、『讃歌』の中には文法上や語彙上の不整合、いわばケアレミスがいくつかあることに注目したい。例えば、8 行目の *κούρην τ'* の *τ'* は後に並列が続くことを示すが、並列されるべきアルテミスとヘスティアは別の文の中で登場する^{*46}。88–90 行目では複数の *ὄρμοι* にかかる動詞が単数形の *ἐλάμπετο* である。これは *ἐλάμπετο* という動詞の数がより近い名詞 (89 *σελήνη*) に引かれたためであろう^{*47}。140 行目では、通常身代金や、死体の返却もしくは和解をするために支払われるものを表す *ἄποινα* が、嫁資の意味で使われている^{*48}。264 行目の複数形の *ἐλάται* と *δρύνες* を、267 行目で単数の代名詞 *ἐ* が受けている^{*49}。291 行目では *οὐρανὸν* に *ἡνεμόεντα* がかかっているが、こうした例は他にはなく、通常 *ἄστερόεις* が *οὐρανός* には用いられる^{*50}。これは 280 行目の *Ἴλιον ἡνεμόεσσαν* というフレーズに影響さ

^{*45} この場合、詩人が、これらの語形が『讃歌』を構成すべき語形でないことを知っていたのに、誤って残してしまったことを想定している。アッティカ方言であるこれらの語形を残す、という過ちを起こしているからといって、その理由として「詩人がアッティカ方言を日常的に使用していたため」と特定しているわけではない。もちろん詩人がアッティカ出身もしくは『讃歌』がアッティカで作られたため、この過ちが生まれた可能性は否定できないが（『讃歌』が小アジア北部以外で作られた可能性については本稿 2.1.2 参照）、上記の 5 つの語形をもとに詩人の日常使用言語を断定することは困難である。

^{*46} 本箇所については、泰田 2006: 22–23 でも指摘した。Denniston, 1954: 514 も、この箇所に関して破格構文 “Anacoluthon” だと考えている。

^{*47} Cf. Allen, Halliday & Sikes 1936: 359. フォークナーならびに、Gemoll 1886: 266 や Van Eck 1978: 38–39 は、この動詞を非人称動詞と取るが、そのような例はほとんどない（フォークナーは Ⅰ 例挙げている：Ⅱ 22. 319 ὥς αἰχμῆς ἀπέλαμπ' εὐήκεος）。

^{*48} Cf. Heitsch 1965: 30 “Das technische Wort ‘Wer-, Buß-, Lösegeld’ wird hier offensichtlich mißbraucht in der Bedeutung ‘Mitgift.’” この誤りは、詩人が『イリアス』Ⅰ巻の *καὶ ἀγλαὰ δέχθαι ἄποινα* (Ⅱ 1. 23, 377) というフレーズを誤用したため起こったのだろう。『イリアス』Ⅰ巻は娘を引き取るための父からの贈り物を受け取ることに言及している場面で、本箇所は結婚に際してアフロディテ扮する少女の父から嫁資を受け取ることに言及する場面である。このように共通点があるため、詩人がこのフレーズを採用した結果、意味の誤用が生じたのだろう。フォークナーは *ἀγλαὰ δέχθαι ἄποινα* がホメロスでは嘆願の中のフレーズであり、本箇所ではこのフレーズを使ってアフロディテがアンキセスに結婚を求める嘆願者であることが強調されていると説明する。だが、いずれにせよ本箇所の *ἄποινα* は一般的とは言いがたい用法である。

^{*49} 本箇所については、泰田 2006: 23 でも指摘した。Hoekstra 1969: 41 も本箇所の複数形は「非文法的な改変」だとするが、フォークナーはそれを認めず「まれではあるが、正当な用法である」と詩人を弁護し、ホメロスの中でも下のようなゼノドトスが提唱する形での Ⅱ 2. 196–97 に従えば、この代名詞が複数を受けることもあると主張する：Ⅱ 2. 196–97: *θυμὸς δὲ μέγας ἐστὶ διοτρεφέων βασιλῆων, | τιμὴ δ' ἐκ Διὸς ἐστι, φιλεῖ δὲ ἐμνήτεια Ζεὺς* 「ゼウスが育む王たちの心は大きく、名誉はゼウスからある。そして彼らを知恵あるゼウスは愛している」（Faulkner 2008: 290）。だが、たとえゼノドトスの例が正しかったとしても、*ἐ* が複数形を受ける例はほとんどない。さらに、アリストアルコスや主要な写本の多くは *διοτρεφέων βασιλῆων* ではなく、*διοτρεφέος βασιλῆος* を採用する。詳しくは Leaf 1886: 48 参照。

^{*50} Abel 1886: 65 はここで *ἄστερόεντα* を採用し、Heitsch 1965: 34 や Càssola 1975: 560 も詩人が *ἄστερόεντα* を採用していた可能性もあると考えている。だが大半の研究者は *ἡνεμόεντα* を支持する。Cf. Allen & Sikes

れてしまったためであろう^{*51}。

以上のことから考えて、詩人の推敲が不十分だった可能性が考えられる。これが彼の性格によるものか、作成した状況や環境によるもの、例えば鉛版に書かれるなどして書き直しが困難な状況にあったかなど^{*52}、いくつかの要因が考えられるが、断定することは難しい。いずれにせよ、推敲不足のため、アッティカ方言の語形が『讃歌』の中に残されたということが、1つの可能性として考えられる。

2つ目は、詩人がホメロスの言語を学んだ際に、詩人の手本の中にすでに上記のアッティカ方言が入っており、詩人がそれらを正しいホメロスの語形だと解釈した可能性である。『讃歌』は『ホメロス讃歌』の中で文体と言語において最もホメロスに近く^{*53}、その語彙の大半はホメロスの中で使われているものである^{*54}。このように詩人はホメロスの語彙に非常に依拠した。アッティカ方言が詩人の手本のホメロスの中にすでに含まれていたのであれば、詩人はそれをアッティカ方言というより、ホメロスの言語として認識した可能性がある。実際に上記のアッティカ方言の形は、以下のようにホメロスの写本の中でも見られる：

	Attic	Ionic	ホメロスの写本でも Attic が確認できる箇所
51	υἱεῖς	υἱας	<i>Il.</i> 5. 159 ^{*55}
72	ῥέσαν	ῥῖσαν	<i>Od.</i> 24. 9 ^{*56}
267	τεμένη	τεμένεα	<i>Od.</i> 11. 185 ^{*57}
284	ἔγγονον	ἔκγονον	<i>Il.</i> 5. 813 ^{*58}

また 125 行目の ἐδόκουν (Ion. δόκεον) はホメロスでは例がないが、ἐδόκουν と同様に -κειω 動詞を -κουν と縮約した形が写本に残されている：*Il.* 14. 116 ὠκουν (Ion. οῖκεον)、20. 218

1904: 221; “Abel’s ἀστερόεντα is, however, quite gratuitous.”

^{*51} Cf. Janko 1982: 160, Faulkner 2008: 297–98.

^{*52} ケニオン 1953: 14–15 はパウサニアスの記述 (9. 31. 4) をもとに、以下のように述べる：「わたくしはこのような詩が（筆者注：『労働と日々』）、ヘリコーン山 [Helikon. ボイオーティアの南方、詩女神がそこに遊んだと伝えられる山] 上でパウサニアースが見せられたように、鉛版に書かれたか、或は何か他のやり方で書き下されずに、保存され得たとは信じられないように思われる。叙事詩圏の諸詩についても同じことが多分言えるだろう。」（だが、ケニオン [49 頁] は詩が鉛版に刻まれることが例外的なことであるとも言っている）。

^{*53} Cf. Richardson 1974: 43.

^{*54} Freed & Bentman 1955: 157 によれば、ホメロスの中で現れない語彙は、『讃歌』の中には 12.75 行に 1 度の割合でしか登場しない。

^{*55} Allen 1931 の ap. cr. 参照。

^{*56} Allen 1919 の ap. cr. 参照。ῥέσαν は、写本ではなく Plat. *R.* 387, a での引用で確認される。

^{*57} Allen 1917 の ap. cr. 参照。アリストアルコスが τεμένεα を採用するが、他では τεμένη が残されている。

^{*58} Allen 1931 の ap. cr. 参照。*Il.* 5. 813 の写本では主格 ἔγγονος が確認される。

ῶκουν (Ion. ῶκεον)^{*59}。以上のことから、詩人の手本のホメロスの中に上記のアッティカ方言の語形が既に入っており、詩人がこれらをホメロスの語彙として正しい形だと認識していたということが、もう 1 つの可能性として考えられる。

どちらの理由で上記の語形が残されたのであれ、これらの語形がアッティカ方言という理由だけで、詩人のオリジナルであることを否定することは難しいと言える。今後の校訂者たちは、これらの語形は本文に残すか^{*60}、もしくはフォークナーと同様にイオニア方言に変更するにせよ、変更する理由として「アッティカ方言である」こと以外の理由を提示する必要があるだろう。

LITERATURE CITED

- Abel, E. 1886. *Homeri hymni, epigrammata, Batrachomyomachia*. Leipzig.
 Allen, T. W. 1912. *Homeri Opera*. Vol. 5. Oxford.
 ——. 1917. *Homeri Opera*. 2nd ed. Vols. 3. Oxford.
 ——. 1919. *Homeri Opera*. 2nd ed. Vols. 4. Oxford.
 ——. 1931. *Homeri Ilias*. Vols. 2–3. Oxford.
 Allen, T. W., and E. E. Sikes. 1904. *The Homeric Hymns*. London.
 Allen, T. W., W. R. Halliday and E. E. Sikes. 1936. *The Homeric Hymns*. 2nd ed. Oxford.
 Càssola, F. 1975. *Inni omerici*. Milan.
 Chantraine, P. 1958. *Grammaire Homérique: Phonétique et Morphologie*. Vol. 1. Paris.
 Clay, J. 2006. *The Politics of Olympus: Form and Meaning in the Major Homeric Hymns*. 2nd ed. Bristol.
 Denniston, J. D. 1954. *The Greek Particles*. 2nd ed., rev. K. J. Dover. Oxford.

^{*59} Allen 1931 の ap. cr. 参照。Il. 20. 218 では、ῶκουν は写本だけでなく、Plat. Lg. 681, e での引用およびエウスタティウスのコメンタリーの中で確認される。

^{*60} もし 51、72、125、267、284 行目全てでアッティカ方言の語形を本文に残そうとした場合、本稿 2 の冒頭で見たように、特に 72、284 行目に関しては、多くの校訂者とは異なる読みを採用することになる。それでも筆者はこれら 2 箇所でアッティカ方言の語形 (72 ἦσαν と 284 ἔργον) が詩人のオリジナルである可能性はあると考える。これまで見てきたことだが、ここでその根拠を 5 点にまとめておきたい：第 1 に、『讃歌』の写本にこれらの語形が残されていること。第 2 に、これらの語形が、写字生が書き間違えたものである証拠がないこと。第 3 に、これらの語形がホメロスの写本にも残されていることから、『讃歌』の詩人が参照したホメロスの詩の中にこれらの語形がすでに含まれていた可能性があること。第 4 に、51、125、267 行目でもアッティカ方言の語形が残されていること。第 5 に、本稿 3 のまとめで示した詩人の性格に関する 2 つの可能性、「推敲が不十分な詩人」もしくは「いくつかのアッティカ方言の語形をホメロスの語彙として正しい形だと判断していた詩人」から考えれば、これらの語形が詩人のオリジナルであっても不思議ではないこと。

- Faulkner, A. 2008. *The Homeric Hymn to Aphrodite: Introduction, Text, and Commentary*. Oxford.
- Freed, G., and R. Bentman. 1955. "The Homeric Hymn to Aphrodite," *CJ* 50: 153–59.
- Gemoll, A. 1886. *Die homerischen Hymnen*. Leipzig.
- Heitsch, E. 1965. *Aphroditehymnos, Aeneas und Homer*. Göttingen.
- Hoekstra, A. 1969. *The Sub-Epic Stage of the Formulaic Tradition*. Amsterdam.
- Humbert, J. 1936. *Homère, Hymnes*. Paris.
- Janko, R. 1982. *Homer, Hesiod and the Hymns: Diachronic Development in Epic Diction*. Cambridge.
- Kamerbeek, J. C. 1967. "Remarques sur l'Hymne à Aphrodite," *Mnemosyne* 20: 385–95.
- Leaf, W. 1886. *The Iliad*. Vol. 1. London.
- Monro, D. B. 1891. *Homeric Grammar*. 2nd. ed. Oxford.
- Richardson, N. 1974. *The Homeric Hymn to Demeter*. Oxford.
- Smith, P. 1981. "Aineiadaí as Patrons of Iliad XX and the Homeric Hymn to Aphrodite," *HSCP* 85: 17–58.
- Van Eck, J. 1978. *The Homeric Hymn to Aphrodite. Introduction, Commentary and Appendices*. Utrecht.
- West, M. L. 1966. *Hesiod, Theogony*. Oxford.
- . 2003. *Homeric Hymns, Homeric Apocrypha, Lives of Homer*. Cambridge, Massachusetts and London.
- Zumbach, O. 1955. *Neuerungen in der Sprache der Homerischen Hymnen*. Winterthur.
- F. G. ケニオン、高津春繁訳、1953 年、『古代の書物』、岩波書店。
- 池田亀鑑、1991 年、『古典学入門』、岩波書店。
- 泰田伊知朗、2006 年、「『アフロディテ讃歌』に関する文献学的注釈——136・136a 行を中心に——」、『西洋古典学研究』、54 号、pp. 14–26。

(台湾 義守大學)